

人とつながれる場づくりを目指して

～ Let's もくもく会！！～

岩手県金ケ崎町 畠山 勝博



## はじめに

全国で「人と人とのつながりの希薄化」「コミュニティの弱体化」が課題になっている。

一因として生活スタイルの多様化が考えられる。例えば、農村地域においては、昔は専業農家が多く、活動時間帯がある程度同一であり、近所の人顔がしっかり見えることで人が分かったが、現代では兼業農家が多く、また多様な勤務形態や価値観により、近所でも顔が見えにくくなっており、地域コミュニティの低下の要因にもなってきている。

地域コミュニティが低下すると町内会や自治会といった住民組織の担い手が不足し共助機能が低下するなど、地域活動が縮小する。また、そのことによって、住民同士の交流の機会が減少し、地域のにぎわいや地域への愛着が失われていくことが懸念されており、各地で地域コミュニティの再生に向け様々な取組が行われているところである。

当町において、筆者は事務局として地域住民の球技大会等のスポーツの企画・運営に携わったが、多様な勤務形態や価値観による参加者の減少と、現在のコミュニティに対するニーズの変化について実感しているところである。一方で地域活動の場は、新たに地域の人を知る機会にもなり、人が集う場として大切であると感じているが、地域活動には参加しにくいという意見もある。そこで、金ケ崎町内には、新たに人のつながりができるオープンな場というのも必要ではないかと考え、「人とつながれる場づくり」を今回のテーマとした。

筆者はソフトウェア開発技術者としての職務経験があり、行政職員となった現在も職務に関連し新しいIT技術等の情報収集を行っている。その中で、主にITエンジニアの集まりの場の一つとして気軽に参加できる「もくもく会」というコミュニティの存在を知った。

そこで、もくもく会スタイルを応用して、当町におけるもくもく会の開催に挑戦し、その可能性を検討してみたい。

## 第1章 金ケ崎町におけるコミュニティの現状と課題

### 第1節 金ケ崎町の概要

当町は人口15,600人(令和元年11月30日現在)、岩手県の内陸南部に位置し、北は北上市、南は奥州市にそれぞれ接しており、山岳部から平野部までの間の1,300mにおよぶ高低差は、さまざまな気象と風土を生み出し、多様な産業を育んできた。

基幹産業の農業は、駒ヶ岳の東側に広がる肥沃な扇状地帯



図1 金ケ崎町の位置

で米・野菜・花きの栽培が盛んであり、西部山麓地帯では広大な牧草地を活用した酪農や大型畜産が行われている。

生産拡大に取り組んでいるアスパラガスでは、アスパラガスの粉末を使用したお菓子や麺などを開発し、特産品化、ブランド化にも力を入れているところである。

工業においては、県内最大級の工業団地を有し、医薬品、半導体、自動車組立工場を含む自動車関連企業などが立地し飛躍的な発展を見せており、地域経済の発展や雇用機会の創出に貢献している。今後 10 年間の岩手県の方向性を示した新総合計画『いわて県民計画（2019～2028）』（平成 31 年 3 月策定）では、当町を含む県南広域振興圏と県央広域振興圏にまたがる北上川流域において、産業振興を推し進める「北上川バレープロジェクト」のエリアに指定されており、モノづくりエリアとして両振興圏の広域的な連携の更なる促進や、イノベーションの創出、高度技術人材の育成、第 4 次産業革命技術のあらゆる産業分野、生活分野への導入などを通じて、働きやすく、暮らしやすい、21 世紀にふさわしい新しい時代を切り拓く先行モデルとなるゾーンの創造を目指している。

当町の人口は昭和 50 年まで減少傾向が続いていたが、昭和 55 年、岩手中部（金ケ崎）工業団地内に立地した大手企業の本格操業を契機に若干の変動はあるものの、主に自動車関連産業を中心とした製造業が雇用の下支え役となり、概ね 16,000 人の横ばいで推移している。

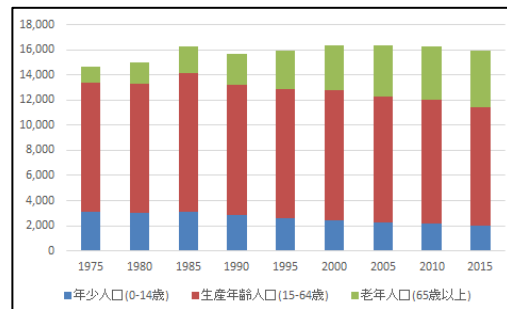


図 2 金ケ崎町人口推移

出典：総務省「国勢調査」

町内の産業構造として、売上高(図 3)をみると製造業が全体の半数以上を占めていることがわかる。製造業においては、県外からの転勤などにより人の入れ替わりも多く見込まれている。

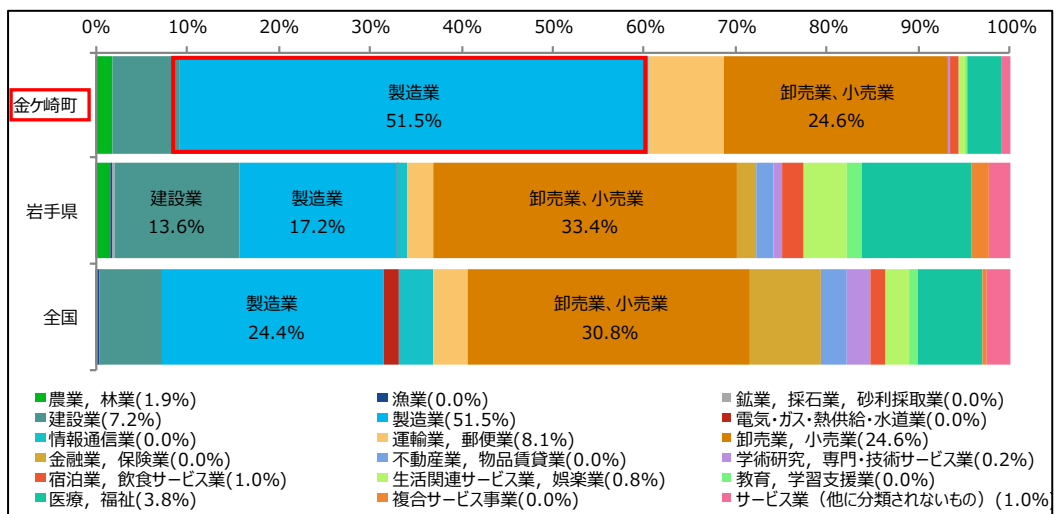


図 3 産業大分類別売上高構成比(2016年)

出典：総務省「経済センサス基礎調査」、総務省・経済産業省「経済センサス活動調査」

## 第 2 節 金ケ崎町におけるコミュニティの現状と課題

当町では平成 29 年度に「地域づくりのあり方検討会」を立ち上げ、高齢化や人口減少、ライフスタイルや価値観が多様化する中での今後の地域づくりのあり方について、議論を重ね、平成 30 年度に結果を最終報告書としてまとめた。その最終報告書によると、地域のネットワークに関し、現在地域で起きている現象として「勤務形態や生活環境の変化による自治会活動への関わり方の変化」と「過度な交流に対する負担感の増加」を挙げている。

具体的には、以下のように書かれている。

「金ケ崎町は製造業を中心とする雇用形態が多いという特徴から、交代勤務の町民の方も多く、自治会活動への参加に制約があると声があり、個人としての生活や家族との時間を大切にしたいという方も増加しており、お祭りなどの従来の地域住民との交流を目的とした行事に対し、負担と感じている方は増えている。また、生涯教育のまち宣言が行われた昭和 50 年代以降は、特に地域の交流を目的とした地域づくりが積極的に行われてきた一方で、現在の地域は若い世代や町外出身者などを中心に、多様な価値観をもつ方が多くなっており、過度な交流や個人への干渉に対し、疑問や負担に思う方が増えている。」

このように、若い世代や新たに転入してきた人が町内各自治会などの地域内の行事や自治会活動に関わるものが少なくなっている。

また、町内 6 生活圏の 1 つである北部地区において、平成 30 年度に北部地域活性化委員会が、北部地区の中学生以上の全住民を対象として実施したまちづくりアンケートの調査結果において、暮らしの中の困りごととして「仲間と気軽に集まる場所がない」という回答が、10 代～30 代の年代でそれぞれベスト 5 に入っている(図 4)。これらのことから、気軽に集まれる場、人とつながることができるオープンな場が求められていることが分かる。

10代			
10代	1	コンビニ・商店が少なく、日常の買い物不便	25.9%
	2	学校が遠く、通学が大変である	23.2%
	3	仲間と気軽に集まる場所がない	19.6%
	4	屋根の雪おろしや玄関先の雪払いなど冬季の除雪	9.8%
	5	保育園が遠く不便	8.9%
20代			
20代	1	屋根の雪おろしや玄関先の雪払いなど冬季の除雪	32.0%
	2	コンビニ・商店が少なく、日常の買い物不便	24.3%
	3	仲間と気軽に集まる場所がない	19.4%
	4	子どもの遊び相手やママ友、子育て相談などの子育て環境	11.7%
	5	食事づくり、洗濯、ゴミ出しなど 幼稚園が少人数であり、子どもが育つ環境が不安	9.7%
30代			
30代	1	屋根の雪おろしや玄関先の雪払いなど冬季の除雪	31.2%
	2	コンビニ・商店が少なく、日常の買い物不便	20.6%
	3	医師や診療科が少ないなど、医療体制に不便を感じる	17.5%
	4	仲間と気軽に集まる場所がない	15.9%
	5	災害への備えや避難	14.3%

図 4 北部地区まちづくりアンケート調査結果より

## 第 2 章 各地に広がりを見せるもくもく会

### 第 1 節 「もくもく会」とは

自習を基本とした勉強会の一種で、参加希望者が開催場所に集まり、各自好きな作業をもくもく(黙々)と進める会として、元々は一人の日本人プロガーが提唱したもので、2007 年頃から始まった。IT エンジニア界隈では注目される技術が頻繁に変わるため、エンジニア同士のゆるいつながりを作り情報交換をする場として各地にもくもく会が普及してい

った。

全国で都市部を中心に開催されており、もくもく会などの IT 勉強会の情報が掲載されている「TECH PLAY」のサイトにて筆者が調べたところ、2019 年 11 月度は 29 都道府県で 271 件のもくもく会が開催された。有志者が主催者としてテーマを定め参加者を募る方法を取り、一般的なもくもく会ではプログラム勉強会など IT 分野をテーマにした開催が多いが、お題を定めないフリーテーマでの開催もあり、多様な開催方法がある。「同じ作業をしている人と情報交換をしたい」、「自宅では何となく仕事や勉強に集中できない」、「一人で作業に向かう気の重さを人と集まることで紛らわせたい」、「気分転換したい」など、参加する理由は様々だが、基本的には集まりを通して他の人とライトにつながることを望んでの参加がベースにあると考えられる。

また、もくもく会では主催側は、基本的には企画や開催案内、場所の確保をするのみで、作業に必要なパソコンや書籍等は参加者が各自で持参するため、主催者側の準備の負担があまりなく、少人数の参加者でも会は成立することができる。さらに参加者が気軽に参加できることも魅力の一つとなっている。

## 第 2 節 先行する岩手県北上市のもくもく会のお話を聞く

岩手県北上市では、プログラミングなどの IT 分野に関する勉強会を目的とした「北上市もくもく会」を平成 30 年から開催している。市内在住の個人事業主（フリーランス）プログラマーが企画・運営をしており、平日夜や土日の午後に毎月 1～3 回程度会を開催している。1 回の定員は 10 名。開催時には市内外から主にプログラム技術者などが参加し、各自持ち寄った作業や勉強などを行う。北上市もくもく会は、平成 30 年の発足当時、北上市の「平成 30 年度まちづくりチャレンジ補助金採択事業」に応募、採択された。事業概要は次のとおりである。

【団体名】北上市もくもく会

【事業名】「つくる人を増やす」デジタルものづくりコミュニティ運営事業

【事業目標】

プログラミング・デザイン・電子工作などの自主的な制作を行っている人や、技術の習得を目指している人が集まる場を作り、情報交換と助け合いによって技術の向上とアイデアの発展を図り、技術を使ったまちづくりに寄与できる人材を育成する。

【事業概要】

- ・自習を基本とした IT 勉強会であるもくもく会を定期的で開催する。
- ・オンラインコミュニティを運営しチャットツール上での交流と情報交換や、SNS 上でのもくもく会開催告知と情報発信、団体ホームページの制作・運営を実施する。

### 北上市もくもく会事業概要

出典：北上市ホームページ

事業開始時から約 30 名が参加。基本的に集まれる人が自由に参加するため、毎回参加者が変わり、何度も参加している人のほか、技術の情報交換や同じ業種の人とのつながりを求めて初めて参加する人も多く、多様な人がこの会に集まっている。

会の主な流れとしては、初めは参加者の自己紹介から開始し、その後各自が自由に作業を行い、指定時間になると今日の作業実績の報告等を行う。会の中では、名刺交換や技術の紹介、相談などしながら「新たな人とのつながり」が自然に生まれている。

そこで、主催者であるフリーランスプログラマーの T さんから話を聞いた。

普段は NPO 法人のスタッフとして勤務している傍ら、個人事業主としてデザインや Web サイトのプログラマーとして開発案件を受託している。県内では IT に関する勉強会が少ないが、市外での勉強会に参加した時に、同じく北上市在住のフリーランスのプログラマーと出会ったのを契機に、北上市内でもプログラム勉強会を開催することを思い立った。北上市もくもく会は、プログラミング関連の参加者が多い会だが、プログラミングに限らず、周辺地域の様々なクリエイティブな人達が集まり、知識や面白そうな事を共有しあいながら、ゆるくつながっている場にしたいと考えている。

時間	内容
13:00 - 13:10	会場準備
13:10 - 13:30	自己紹介 or 近況報告 目標 (各 5 分以内)
13:30 - 17:00	各自もくもくと作業 or 相談
17:00 - 17:55	成果発表、希望者 LT (各 5 分以内)
17:55 - 18:00	撤収作業

表 1 タイムスケジュール一例

北上市在住者以外にも県内各市町村からの参加があり、出張等で北上市周辺を訪れてきた方のスポット参加もある。会を企画して分かったのは、予想以上にフリーランスで活動しているプログラマーが多かったことである。個人事業主はそれぞれ単独で活動しているため、周辺にプログラミングを主体とした個人事業主がどの程度いるかこの会を開催するまで分からなかった。また、参加者はこういった情報交換できる場や人とのつながりを期待して参加している傾向にある。

今後の展開としては、現時点で「バックエンド」といわれる Web サイトの実処理を行うプログラム技術者の参加が多いため、「フロントエンド」といわれる Web サイトのページ表示部分を担当する Web デザイナー関連をテーマにした会を開催し、いずれフロントエンドエンジニアとバックエンドエンジニアを引き合わせて、オープンイノベーションを生み出す空間にしていきたいと考えている。

### 第 3 章 金ケ崎町でのもくもく会を実践する

#### 第 1 節 企画の内容

当町では気軽に集まれる場が少ないということと、過度な交流事業には参加しにくいという意見があることから、自分の好きな作業をしながらライトに人と繋がることのできる「もくもく会」スタイルによる集まりの場のニーズがあるのではないかと考えた。そこで、筆者個人で新たに金ケ崎町もくもく会を企画・開催をした。

当町では、北上市もくもく会の運営を参考にしつつ、様々な人を集まりやすくするため、一般的なもくもく会のよう



図 5 金ケ崎町もくもく会  
チラシ

に特定のテーマを設けず、パソコン作業、読書や勉強、手芸や工芸など、黙々と作業できるものであれば何でも構わないというフリーテーマでの開催とした。周知方法としては、町内のイベント時にチラシを配布、町内公共施設へのチラシ掲示、Facebook の金ケ崎町もくもく会ページを作成した。

開催日は、令和元年 10 月 27 日(日)、11 月 23 日(土)、12 月 14 日(土)の計 3 回、開催場所は、10 月は町内公共施設の会議室、11 月と 12 月は町内のカフェ施設で開催した。初めに簡単な自己紹介を行い、その後各自で作業し、最後に希望者がその日の作業結果を報告する成果発表や告知等を行う流れを設定した。

## 第 2 節 開催結果と考察

全 3 回の開催で、延べ 11 名に参加いただき、町内居住者のほか、近隣市町村からの参加もあった。参加者の作業内容については、プログラミングの勉強などの IT 系作業が最も多く、他には資格の勉強、仕事の資料作成、読書、アクセサリ制作、受験勉強などの作業があり、フリーテーマとしたことで、様々な作業を持つ人が集まった。また、第 3 回目には中学生の参加もあり様々な世代の参加をいただいた(表 2)。

参加者へ参加理由をヒアリングしたところ、一番多い回答は「内容に興味があった」、次に「参加者とのちょっとした交流をしてみたいから」であった(図 6)。

また、もくもく会のような参加者との情報交換やゆるいつながりを目的とした場の必要性を尋ねたところ、全員からこのような場は「必要である」との回答であった。

【年代別】		【男女別】		【参加者の作業内容】	
10代	1名	男性	9名	プログラム関係	6件
20代	0名	女性	2名	仕事の資料作り	1件
30代	1名	【居住地別】		読書	1件
40代	8名	町内	9名	アクセサリ制作	1件
50代	1名	町外	2名	資格試験勉強	1件
				受験勉強	1件

表 2 参加者の属性

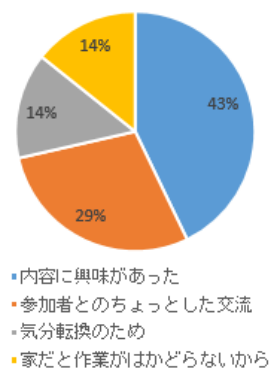


図 6 参加理由

参加者からは以下のような話を聞くことができた。

### 【参加者：Aさん 町内在住 男性】

システムエンジニアの仕事をしている。今回、参加者とのちょっとした交流をしてみたが参加した。同じ分野の人と色々情報交換ができてとても良かった。もくもく会のように参加者との情報交換やちょっとしたつながりの場は必要だと思っている。今回は IT 関係の作業をしたが、IT 関係だけではなく幅広い交流の場があれば、今後何かしらのつながりになると思う。もう少し参加人数が多くなればもっと様々なつながりができて面白いと思う。

**【参加者：Bさん 町外在住 女性】**

アクセサリーの制作、販売をしている。今回のもくもく会では、アクセサリーの作成やパソコンを使ってのイベントのPOP作成をした。今回参加したのは内容に興味があったのと、参加者とのちょっとした交流を試みたかったからである。家とは異なる環境で、集中して作業ができた。もくもく会のような人と繋がることのできる場があることで、自分の仕事の幅が広がりそうと感じた。また、様々な作業を見ることができ、自分の知らない分野を少しでも知れて刺激的だった。

もくもく会では、各自作業を行う時間があるが、「もくもく(黙々)」というキーワードを聞くと作業時間内はずっと静かに作業をしなければならないイメージが浮かびがちだが、実際には作業時間中は参加者同士でちょっとした雑談や情報交換などをする場面もあり、少し緊張感もありながら、和やかな雰囲気の中で作業が行われた。これは北上市もくもく会でも同様の雰囲気である。情報交換については、同分野の参加者同士では分からないことを教え合い、新しい情報を提供するなど、お互い学び合いながら協働の形で作業が行われた。異分野の作業の間では、それぞれの作業について教え合うことで見聞を広めることができ、世代に関係なく自然に交流が生まれていた。そのような交流や情報交換を通して、人や技術のつながりが形成されていくということを、今回開催してみて強く実感した。

また、もくもく会を開催し感じたことは、「境界」が程よく設定されることである。

慶応義塾大学の飯盛義徳教授は、次のように指摘している。「地域づくりにおいては、資源化プロセスが大切であり、その肝となるのは地域内外の新しいつながりをつくっていくこと、その基盤となる仕組みや制度などを『プラットフォーム』と定義し、このプラットフォームへの参加の障壁、つまり境界をどのように設計するかを配慮する必要がある。」また、新しい活動や価値を生み出すに

は、信頼のおける人たちとの強いつながりをベースに、新しい知や情報をもたらす人たちとの弱いつながりが効果的に結合した構造になっていることが必要であり、プラットフォームにおける効果的な境界設計で重要なこととして次の3点を挙げている。

- ・強すぎず（高すぎず）、弱すぎず（低すぎず）
- ・可視性が高く、出入り可能
- ・内部の人に何らかのアイデンティティが形成される

飯盛先生によるこれらのことに着目すると、もくもく会も1つのプラットフォームとして、主催者を含むコアメンバーを中心にしながら、常に新しい人が自由参加できる環境であり、人や技術がつながり新しい情報を得ることができ、かつオープンな集まりだが「各自で黙々とできる作業を持参すること」という一定の制限を設けていることで、境界の設



写真1 金ケ崎町もくもく会の様子  
(第3回開催時)

定が適度に保たれている。また、この境界の設定については、開催テーマや参加条件次第で強くすることも弱くすることも会の目的に合わせて任意に設定することも可能である。

図 7 は各集まりの場における主なコミュニケーションの流れを簡易的に表したものである。「A」は、講習会など講師がいる場合である。この場合は基本的に講師側から参加者側への一方的な発信で、参加者同士のつながりは会の本来の目的としていないため活発にコミュニケーションは発生しにくい。「B」は、喫茶店などオープンな場での様子である。この場合、知り合いがいなければ基本的に周辺の人達とのコミュニケーションは発生しない。仮にパソコン作業のために一人で喫茶店に行った場合、単に一人で作業をするだけである。「C」は、もくもく会の場合である。参加者同士は初対面だとしても、会の冒頭の簡単な自己紹介や作業をしながら集まった人たちとちょっとした情報交換をするなど自然に多数のコミュニケーションが発生するため、一人でパソコン作業のために会に参加した場合でも参加者同士でゆるいつながりができる。

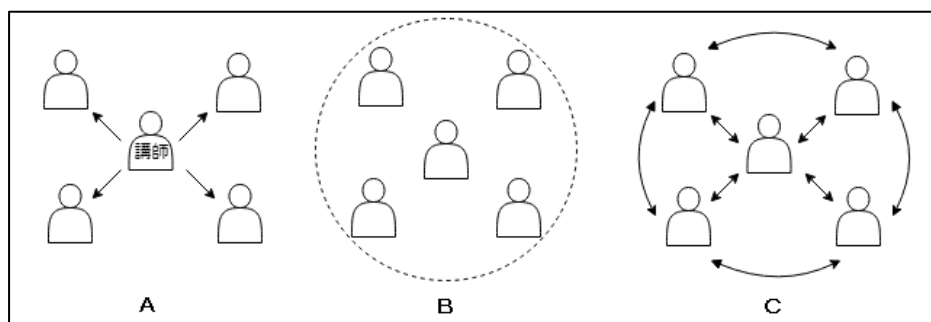


図 7 各集まりの場でのコミュニケーションの流れ

### 第 3 節 金ケ崎町におけるもくもく会の役割と可能性

実際に開催してみて、もくもく会は様々な人が集い、人や作業を知ることができ、新たな取組や連携などに繋がる可能性があると感じた。もくもく会では、同じ作業を持つ人たちの情報交換や、異分野の作業内容や情報収集の場になる。

また、会場としたカフェに初めて訪れたという参加者も多く、その店を気に入っていたことから、ちょっとした「まちバル」として参加者が町内の各店舗や施設を新たに知る 1 つのきっかけになることが分かった。もくもく会では「人と人」、「技術と技術」、「人と場所」をつなぐ役割を担うことができる。

もくもく会をきっかけとして、「人がつながる→技術がつながる→社会的創発→チャレンジできる街・ワクワクが増える街→地域への愛着増」へと発展し、金ケ崎町まち・ひと・しごと創生総合戦略に掲げられている「若者が暮らしたいまち」、「女性にとって魅力的なまち」、「活力と特色のある地域」へとつながる可能性があるのではないかと。

## 第 4 章 金ケ崎町における人とつながれる場づくりに向けて

### 第 1 節 町でのコミュニティのあり方

慶応義塾大学の飯盛義徳教授は、地域づくりの活動に関して以下のようにも述べている。



「『次々と新しい自発的な活動が生まれること』を目指し、基本となる大切なポイントとして、資源(能力)が結集して結合する空間をつくることで、様々な主体との協力、相互作用が生まれ、予期もしないような活動や価値を次々と生み出していく(社会的創発)こと。また、新しい活動や価値を生み出すには信頼のおける人たちとの強いつながりをベースに、新しい知や情報をもたらす人たちとの弱いつながりが効果的に結合した構造になっていることが必要である。」

もくもく会のスタイルはこのような要素が自然に生まれやすい環境であるとともに、社会的創発をもたらす可能性を秘めており、金ケ崎町もくもく会も、町の新たなプラットフォームになり得る。町内には自治会や各活動団体などのコミュニティがあるが、多様なニーズや価値観がある現代は、もくもく会のように個人が気軽に集まれる場、人や技術がつながり新しい活動が創出しやすい場というのが今の当町に必要である。

## 第2節 今後の活動の展望

金ケ崎町もくもく会ではフリーテーマでの開催とし、様々な作業をもつ人たちとのつながりができたところだが、主軸となるテーマを設けて開催することで、ニーズに届きやすい側面もあると考えており、テーマを設定した内容も今後実施したい。

また、筆者はソフトウェアに多様な可能性を感じており、当町でソフトウェア産業を創出したいという想いをもっている。当町は県内随一の工業団地を有しているモノづくりのまちだが、ハード面の産業は多くある一方で、ソフトウェア面での産業はほとんどない。ソフトウェア産業は、東京一極集中の状態が続いている典型的な産業だが、業務によってはインターネット環境があれば作業場所を問わない場合も多く、近年は地方に移住し農業を営みながら都市部から仕事を受託するITエンジニアも増加傾向にある。しかし、当町ではITエンジニアの支援や活動のサポートをするような取組は現時点では特に用意されていない。

ITエンジニアの人材育成というのは、日本でも重要課題として挙げられており、モノづくり地域として、ITエンジニアの人材育成・産業・雇用についても考え、今後当町でも取り組んでいく必要があると思われる。

その一歩として、金ケ崎町もくもく会はITエンジニアやクリエイターが活動や情報交換をする場にもしていきたい。

## おわりに

今回金ケ崎町でのもくもく会の実践を通し、多様なニーズがある中で当町でのもくもく会も一定のニーズがあることや、会はテーマや開催場所を工夫することで、様々な町の魅力が提供できる可能性があることが分かった。

ライフスタイルの多様化などに伴い、地域コミュニティの衰退や孤立が問題視されている中で、地域の人々が集まる場として「サードプレイス」という場が求められている。「サードプレイス」とは、コミュニティにおいて、自宅(ファーストプレイス)や職場や学校(セカンドプレイス)とは異なる心地のよい自分らしい時間を過ごすことができる「第3の居場

所」のことである。多様な人が集い、職務や立場に関係なく他者との関わりを通じて社会的な交流を実現することができる場とされており、東京都港区の「芝の家」などがサードプレイスの成功事例である。芝の家のように常設の場ではないが、自分の作業をするために気軽に集まれる場、多様な人や資源が偶発的に出会う場、地域コミュニティの生まれる場として金ケ崎町もくもく会も「サードプレイス」に位置付けることができるのではないだろうか。

金ケ崎町もくもく会の取組は始まったばかりであり、多様な展開や可能性を秘めていると感じている。今後も活動を継続しながら、様々な人が気軽に集まれる場、人や資源をつなぎ、新しい発見、新しい価値が創造できるワクワクする場にしていきたい。

**【参考文献、引用、ホームページ等】**

- ・岩手県『いわて県民計画（2019～2028）』
- ・金ケ崎町人口ビジョン(2016年)
- ・金ケ崎町北部地区まちづくりアンケート分析レポート(2018年)
- ・金ケ崎町地域づくりのあり方検討会 最終報告書(2018年)
- ・もくもく会ポータル<<https://mokumokukai.tumblr.com/>>
- ・北上市ホームページ<<https://www.city.kitakami.iwate.jp/>>
- ・connpass 北上市もくもく会ページ<<https://kitakami-moku2kai.connpass.com/>>
- ・TECH PLAY<<https://techplay.jp/>>
- ・飯盛義徳『地域づくりのプラットフォーム つながりをつくり、創発を生む仕組みづくり』学芸出版社 2015年

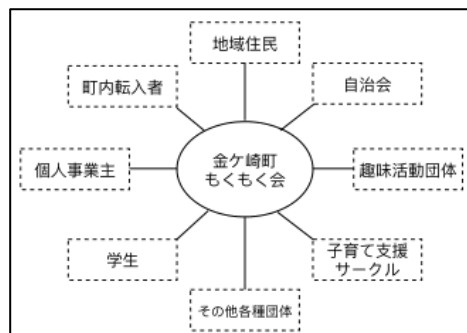


図8 もくもく会でのつながりイメージ